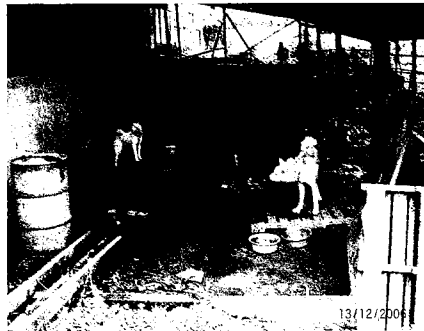


佐賀の繁殖業者による犬虐待事件



日本はG8の一員を誇る経済大国でも、動物福祉に関しては、未だに中世、暗黒時代のレベルにあります。ペットブームに乗かって一儲けしようと、日本中にのさばっているのがブリーダー。2007年6月からは、飼育業者も登録が義務付けられ、事業所の検査を受けることになるものの、動物虐待に無関心で、怠慢な自治体当局が、各場所の立入り検査を実施して基準が守られているかどうかを確認するのは無理でしょう。

最近表面化した佐賀県のケースは、行政当局の対応がどんなに手ぬるいかを如実に示すものです。問題の繁殖業者は15年前から営業を続けており、その場所はまさしく「生き地獄」そのもの。当局は状況を把握していました——犬が何匹も死んだことも、業者が犬に狂犬病ワクチンを一度も接種させず、狂犬病予防法に違反していることも——すべてを承知しながら、何ら手を打たなかったのです。約150頭の犬（その大部分が秋田犬と柴犬）が次第に衰弱し、やがて死を迎えるであろう状態でした。

2006年2月13日、ワンライフ（WAN LIFE）の島田代表とアークのオリバーは大阪空港から佐賀に飛びました。ブリーダーが経営するのは、佐賀市内の自称「ペットショップ」と、車で約1時間半離れた鹿島市にある繁殖場の2ヶ所です。飼育施設は、土地の産業であるミカン畑の広がる一帯にあり、主な建物が1つと、棟続きの屋根つき犬舎が並ぶエリア、それに、犬を収容する囲いとケージが数多く点在する区域に分かれています。入り口には、わずかな「ひさし」のついた板敷きにアイリッシュ・セッターがつながれ、その隣には、秋田犬が屋根も犬舎もないところに縛りつけられたまま。どちらの犬も、餌はなく、水入れには前々日から降った雨のしずくが残っているだけ。

建物の周りには、惨めな囲いが幾つも並んでいます。つながれたり、ケージに収容された犬たちは、長年とまではいなくても、少なくとも数か月間、排泄物と抜け毛の上に立ち

続けているのです。不潔な餌入れはからっぽで、水のない容器には青藻がこびりついたまま。犬の表情が彼らの苦しみを物語っています。おそらく、彼らは、鎖をはずされたこともなければ、何か月もケージから出してもらっていないはず。長く伸びた爪は、一度も運動したことがない証拠です。つながれた犬の中には、鎖が皮膚に食い込んで、首のあたりが腫れているものもあります。建物に沿ってまわりこんだところに開口部があり、そこから、つながれたり、ケージに入った多数の犬をうかがうことができました。糞尿と雨水の滲みの中に、犬の骨が数個見えており、入り口には、7頭分の頭蓋骨と体の骨が散乱し、また、うじ虫のたかった腐乱死体が1体。すさまじい異臭を放っています。私は、これまで30年間以上、日本でこの種の「生き地獄」を何度も見てきましたが、中でも、今回のケースが最悪でした。

2006年12月26日、私どもは、アークとワンライフの名前で、佐賀県知事と佐賀県警察本部宛に、弁護士を通して告発文書を送りました。無情なブリーダーに対し、1999年改正の動物愛護管理法と狂犬病予防法違反に問うものです。

2007年1月11日、私どもは再び佐賀を訪れました。警察は私どもが送った申し立て書類と告発文をすでに読んでいました。その日は、事前に連絡してあったメディアによる大々的な報道が功を奏して、結局、12日には、佐賀県当局も繁殖業者を告発するとの発表に至ったのです。13日に、私どもは、佐賀市内にある男の「ペットショップ」を視察しました。鹿島の繁殖場に比べると、動物の数が少なく、交通のはげしい道沿いであって、中がよく見えますが、実態は同じようなものでした。私どもが目撃したのは……

2つの小屋に小型ケージが多数積み重ねられ、（長期の飼育用ではなく、病院に運ぶときに使うような）各ケージには柴犬が入れられ、餌も水もなく、皆、必死で外に出たがっています。どこもかしこも排泄物だらけ。1匹の若

い柴犬は足が1本折れているらしく、長く伸びた爪は、散歩に連れ出されたことがない証拠です。

道路脇のプラスチック製犬小屋には黒い柴犬がつながれ、ひどい下痢をしている様子でした。店の入り口の前には、斑の秋田犬（雌）がいましたが、輪縄をきつく締めすぎて宙吊り状態に……つまり、眠るときも頭が地につかないのです。道沿いの小屋には窓があり、中にケージが数個見えます。その1つには、茶色の若い柴犬が、10cmほどの厚さに固まったフンの上に横たわっています。傍らのケージには子犬が2、3匹入れられ、別のには、死にかかった柴犬が……荒い呼吸をしているのが窓越しに見え、頭を起こしたとき、皮膚にひどい傷が認められました。

店の隣家に住む男性の話では、この状況は10年も前から続いているとのこと。夏になると、道路脇の大量の排泄物がハエやネズミをおびき寄せるので、店を閉鎖してほしいと近隣の住民が請願を起こしました。しかし、度重なる抗議にもかかわらず、県当局は何の措置も講じなかったのです。

今回、私どもは、警察と保健所に予め連絡をとり、メディアにも知らせました。保健所と警察が言うには、店の所有者の許可なく建物に入ることはできないとのこと。私どもは、午前10時から午後2時まで待ちました。ようやく、ブリーダーが姿を見せ、保健所の「獣医師」（2名）は建物内に入ることができました。彼らがしたことは……柴犬の死骸を取り除いただけ。そして、男には……

「ケージがちょっと小さ過ぎますね！」と言っただけ。犬たちの置かれた悲劇的状况について彼らが何も触れなかったのは明らかです。餌も水も与えず、ケージの中は汚物まみれで、運動もさせていないことなど……何ひとつ。だからといって、驚くには当たりません——保健所の獣医師というのは「ペーパーライセンス」保有者で、動物を扱う実務経験を積んでいないのが普通だからです。